興津式土器標式資料についての考察

A study of the Okotsu-type pottery that was excavated from the type site

澤田　恭平※

Kyohei SAWADA

はじめに

興津式土器は、道東部を中心に分布する続縄文前半の土器型式である。この土器型式は、釧路市立郷土博物館が1976年から1978年に行った興津遺跡発掘調査の所見を基に澤四郎が設定した（澤ほか編1977、澤編1978、澤編1979）。

ここで取り扱う資料は、遺跡地で漁業を営んでいた関本善八氏が1958年に採集したもので、この土器型式を設定する契機となった一群である。

小稿ではこの「関本資料」を通して興津式土器の内容について考察する。

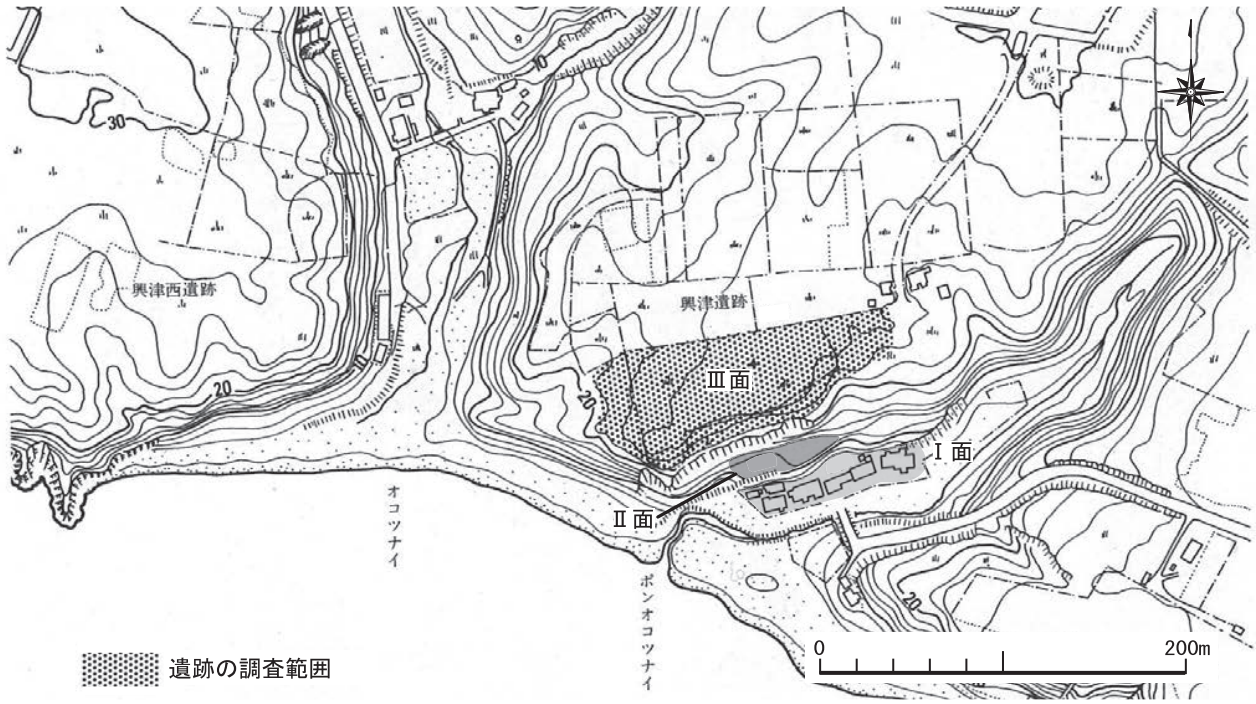
1．興津遺跡の調査概要（第1図）

「オコツ」はアイヌ語の「オうコッナィ」に由来する。原義は「o-u-kot-nay：陰部を・おたがい・につけている・川、交尾している川」（知里1956）で転じて「二の沢が一つに合う沢」と解されている（佐藤1956）。それが示すように遺跡は、西側のオコツナイ（興津川）、東側のポンオコツナイ（太平川）に挟まれた箇所に位置する。

遺物は標高が異なる3つの面に分布する。Ⅰ面はオコツナイ右岸に沿う低位面で、奥行7m×幅100m、標高4～5m、Ⅱ面は段丘崖に位置する中位面で、奥行7m×幅20m、標高16～18m、Ⅲ面は高位の釧路段丘面で、標高22～28mをそれぞれ計測する。

関本資料はⅠ面で採集されたものである。澤は資料採集の報を受け1959年に周辺を踏査し、Ⅱ面にも遺物が分布することを明らかにした。同面では墓とみられる円形プランが数箇所確認されたという（澤1959）。Ⅲ面での遺構、遺物の広がりは1974年の分布調査で確認された。この面がその後、昆布干場造成工事を前に3次にわたって発掘調査が実施された地点である。この調査では、遺物58,686点、遺構115箇所（住居址11、墓6、ピット85、炉跡・焼土13）が発見された（註1）。

それらの時期には、縄文前期、縄文中期、続縄文前半、擦文があるが主体となるのは続縄文前半で、動物遺存体の分析から海獣を中心にカジキ類などの回遊性魚類の捕獲を主な生業とした集落が復元されている（牛沢1979）。



第1図　遺跡周辺の地形（釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ（1979）を基に作成）

※ 釧路市埋蔵文化財調査センター Kushiro City Archaeological Operations Center

２．関本資料の概要

澤が実見時に確認した数量は、完形土器が8個体相当、石槍14点、掻器15点、片刃石斧6点のほか土器片が整理箱1個分と記述されている。現時点で把握した遺物は、土器が完形または復元個体5点、破片236点（口縁部65・胴部139・底部32）である。器種には深鉢、浅鉢、鉢、壺、漏斗状土器がある。完形また復元個体は各器種それぞれ1個体で、口縁部破片を含め推定した個体数は52点（深鉢46・鉢1・浅鉢2・壺2・漏斗状1）である。石器は36点（石鏃6・石槍またはナイフ3・柄付きナイフ2・削器7・掻器12・片刃石斧6）である。資料の内容は、細部で名称や点数は異なるが、総量からみて実見時の内容をほぼ保っていると判断される（註2）。

３．分類

分類は器種ごとに胴部から口縁部の形態（1）、突起の有無など口縁部の詳細（2）、文様（3）の組み合わせで細別した。底部は別に特徴をまとめた。

深鉢（第2図1～第3図54）：14に分類した。

分類基準

(1) A：胴部が膨らみ、口縁部が内傾するもの
　　B：胴部が膨らみ、口縁部が緩く外反するもの
　　C：胴部から口縁部にかけて外傾するもの

(2) a：平縁またはこれに山形突起が付くもの
　　b：小波状口縁風なもの

(3)①：沈線文が施されるもの
　　②：貝殻文や綾くり文が施されるもの
　　③：刺突文や縄線文、隆線が施されるもの
　　④：突瘤文が施されるもの
　　⑤：縄線文と微隆線が施されるもの
　　⑥：無文のもの（藤沼ほか2008）

第1類（Aa①）：1個体（1）

1は浅い平行沈線が5条施されるもの。口唇は面取りされる。

第2類（Ca②）：2個体（2・3）

2は口唇と口縁部に貝殻腹縁文が施されるもの。施文具の原材は深い放射肋をもつ二枚貝で、殻縁を1.5～2.0cm幅に折り取って用いられている。口唇では面取りされた後、2列が施される。口縁部では殻表面を上にし、器面に対して右上がりに押圧される。こうして6列がつくられているが、連続する貝殻文の端部が重ねられているため綾くり文に似た効果がもたらされている。胴部の縄文は単節LRである。薄手で調整は丁寧である。3は単節RLによる綾くり文が施されたもの。胎土に石英粒を多く含む。胴部の縄文は単節RLである。

第3類（Ba③）：8個体（4～11）

口縁部は山形突起をもつものがあり、口唇に縄文や刺突文が施される。4は無節RとLの縄線文が交互に施されるもの。口唇外縁には縄による刻みがある。5の縄線文は単節LRで縦方向に施される。刺突文は7、8、10、11が縄端、9が棒状の施文具によるもので、横位に2列または3列めぐる。11は山形突起から縦方向に刺突文が3列施されるもの。6は底部の大半と口縁部を部分的に欠くがほぼ器形を復元できた。分類Baの典型例である。口縁部に縄の刻みを施した山形突起が1対配される。このため上面観はやや楕円形をなす。文様は隆線、縄線文、刺突文からなる。山形突起の下には円孔をもつボタン様の貼り付けがある。隆線はその両側と山形突起のない位置にも1対ある。後者は口縁部で二股に分かれるがいずれも底部付近まで垂下する。隆線上の文様は前者が縄文、後者が棒状施文具による刺突が施される。刺突は下方から突き上げられており、口唇上にも施される。口縁部には無節L、R原体2本を並列させ押圧した縄線文が5条（組）施される。このため文様は3本組紐押圧に類似した効果がある。胴部に単節LR縄文が施される。回転方向は器面に対して縦である。施文は地文→円形貼付、隆線→縄線文の順で行われる。口径9.2cm、器高16.5cm。10は3個1単位の縄端刺突を2段めぐらせるもの。外面の剥落が顕著である。推定口径19.9cm、残存高16.4cm。本類の胴部の縄文は単節LRが4点（5・6・9・11）、単節RLが3点（7・8・10）、縄文がみられないものが1点（4）ある。薄手で調整は丁寧なものが多い。

第4類（Ca③）：5個体（12～16）

口唇が面取りされるものが多い。12、14は単節RL、13は無節Lの縄線文が施されるもの。15は無節Rの縄線文を3条めぐらせた後、縦方向に短い縄線文を加えている。推定口径13.4cm、残存高11.3cm。16は右上がりの隆線が貼り付けられたもの。本類の胴部の縄文は単節RL（12）、単節LR（16）が各1点で、縄文がみられないものが3点（13～15）ある。薄手で調整は3類と同様に丁寧である。

第5類（Aa④）：4個体（17～20）

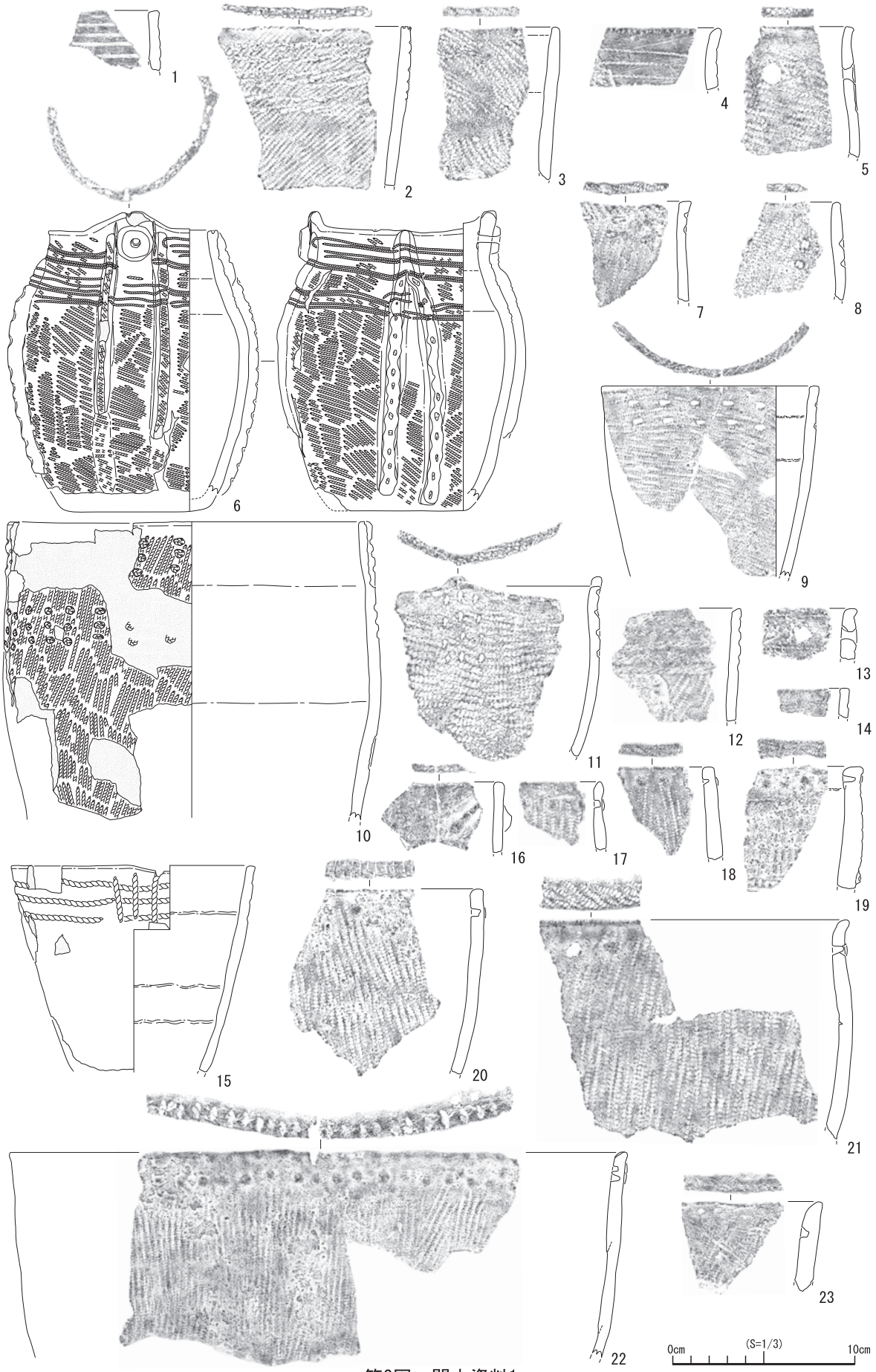
このグループの突瘤文は内面からの刺突による。17は口縁部がやや肥厚する。18、19の口唇には縄文、20には細い無節R原体の刻みが施される。19は上位から突瘤文、無節Rによる6条の縄線文が施され、最下位に縄の刻みをもつ隆線が貼り付けられる。厚手の部類である。本類の胴部の縄文は単節RLが3点（17・18・20）、単節LRが1点（19）ある。調整は粗雑なものがある（19）。胎土に石英粒を多く含むものがある（18、19）。

第6類（Ba④）：１個体（21）

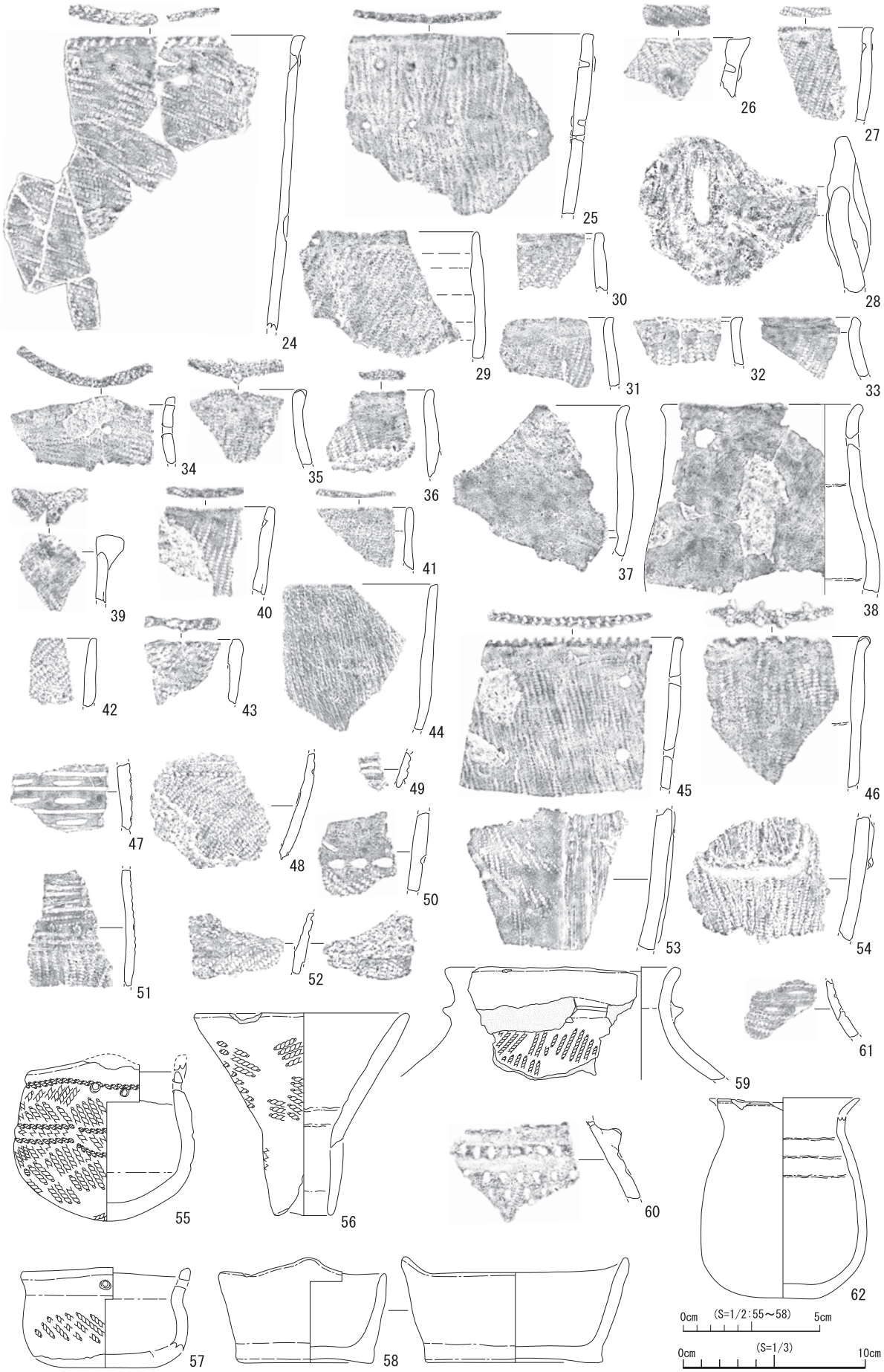
突瘤文の手法は5類と同様である。口縁部内面に縄文が施される。胴部の縄文は単節RL。貫通孔は突瘤を利用した補修孔の可能性がある。調整は丁寧で内面に指頭による調整痕が認められる。

第7類（Ca④）：6個体（22～27）

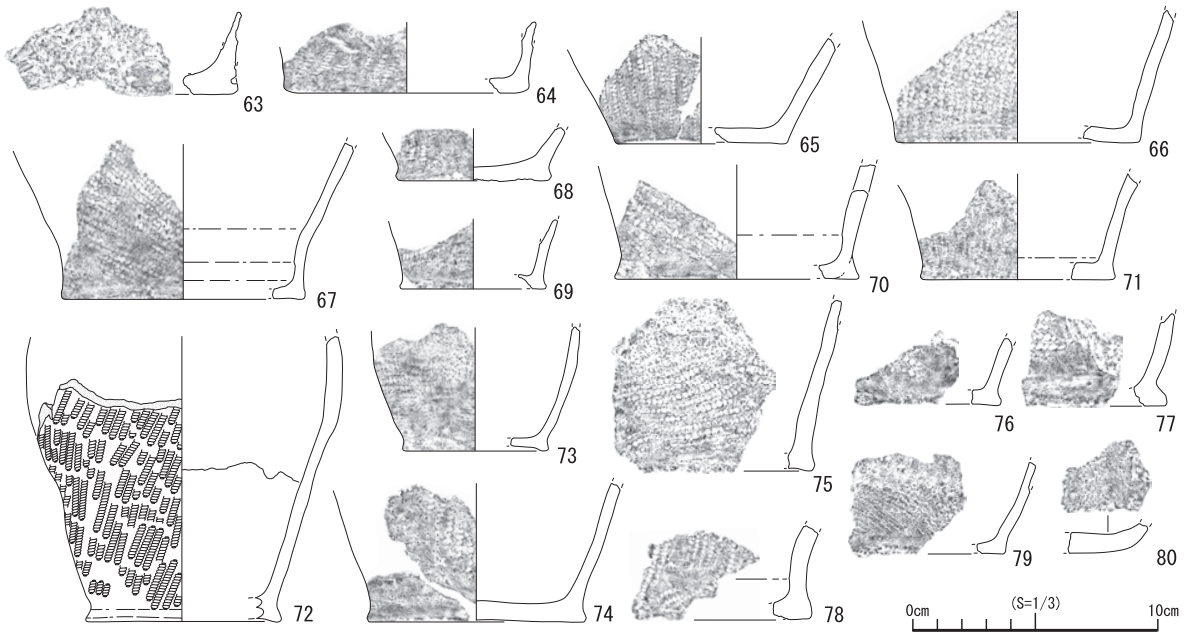
突瘤文は外面からの刺突によるものがある（25）。23～27は口唇に縄文、22は単節RL原体による刻みが施される。推定口径34.0cm。24は口唇外縁に単



第2図　関本資料1


24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0cm (S=1/2:55～58) 5cm
0cm (S=1/3) 10cm

第3図　関本資料2



第4図　関本資料3

節LRによる刻みがある。突瘤文の施文具は22、23、25、26のように棒状のものが多いが、24には半裁竹管状のもの、27には縄端が用いられる。22、24、26、27は口唇付近で外傾の度合いがます。23は厚手で刺突が浅いことから外面に瘤は形成されないが便宜上、本類に含めた。本類の胴部の縄文は単節RLが4点（22・23・26・27）、単節LRが2点（24・25）ある。調整は24、27が丁寧、22、23、25は粗雑である。22、23、25は砂礫を多く含む。

第8類（Ba⑤）：１個体（28）

28は山形突起頂部から垂下する幅広の貼り付けに短沈線をなぞったもの。貼り付けの下部から細い隆線が斜め下方向に施される。胴部の縄文は単節RLである。調整は粗雑。厚手で砂礫を多く含む。

第9類（Aa⑥）：2個体（29・30）

口唇が面取りされ口縁部に幅の狭い無文部があるもの。胴部の縄文は単節RL。薄手で調整が丁寧。

第10類（Ba⑥）：8個体（31～38）

器形は3類に類似する。31～33は口唇が面取りされるもの。33の面取りは外縁側である。34～36の口唇には縄文が施される。34、35は山形突起が付く。31は幅の狭い無文部がある。38の器面は平滑に調整される。補修孔が2個みられる。推定口径10.8cm、残存高10.3cm。本類の胴部の縄文は単節RLが5点（31・33～36）、単節LRが1点（32）で縄文がみられないものが2点（37・38）ある。造作は厚手もある（37・38）が薄手で調整は丁寧なものが多い。31、35、37は砂礫を多く含む。

第11類（Ca⑥）：6個体（39～44）

器形は4類に類似する。口唇は42、44が面取りされ、39～41、43には縄文が施される。39の山形突起には瘤様の貼り付けがある。本類の胴部の縄文は単節RLが3点（39～41）、単節LRが2点（42・43）、撚糸文が1点（44）ある。薄手で調整は丁寧である。

第12類（Cb⑥）：2個体（45・46）

45は刻みの間隔が密で外縁寄りに施されるのに対し、46は間隔が広く口唇を覆っている。45には外面からの補修孔が2個ある。胴部の縄文はともに単節RL。薄手であるが調整は丁寧なもの（45）と粗雑なものがある（46）。

第13類（①・③）：6個体（47～52）

沈線文や縄線文、刺突文が施される胴部破片を一括した。47は平行沈線と短沈線が交互に施されるもの。器面は丁寧に研磨される。51は縄線文間に縄端が押圧される。52は内面も縄文がある。

第14類（⑤）：2個体（53・54）

細い隆線が貼り付けられた胴部破片。文様は8類に類似する。53は縦方向の隆線上と隆線間に無節Lの縄線文が、54は隆線に単節RLの縄端圧痕が施される。胴部の縄文はいずれも単節RL。8類と同じく厚手だが調整は丁寧である。砂礫を少量含む。

鉢（第3図55）：１類のみである。

55は丸底の小形鉢。口縁部の約半周を欠損する。単節LR縄文を施した後、口縁部と胴部に縄線文が施される。山形突起が付くとみられ、その直下に円孔が2個ある。薄手で調整は丁寧。砂礫を多く含む。赤色顔料が付着する。推定口径5.6cm、残存高5.9cm。

浅鉢（第3図57・58）：2分類した。

分類基準

(1) A：胴部が膨らみ、口縁部が緩く外反するもの
　　B：胴部から口縁部にかけて外傾するもの
(2) a：平縁で山形突起が付くもの
(3)①：無文のもの

第1類（Aa①）：1個体（57）

底部外面が剥落する。口縁部の相対した位置に円孔が1対ある。薄手で調整は粗雑である。胴部の

縄文は単節RL。口径5.9㎝、残存高3.7㎝。

第2類（Ba①）：1個体（58）

上面観は楕円形をなし、長軸方向の口縁に山形突起が１対配される。底面は浅い上げ底である。調整は丁寧。口径6.1×8.4㎝、器高4.9㎝。

壺（第3図59～62）：3分類した。

(1)A：頸部が短く、口縁部が強く外反するもの

(2)a：平縁

(3)①：頸部に隆線がめぐるもの

②：縄線文と短沈線が施されるもの

③：無文のもの

第1類（Aa①）：1個体（59）

頸部に断面が三角形となる隆線が貼り付けられる。砂礫を多く含む。胴部の縄文は単節RL。薄手で調整は丁寧である。推定口径13.0㎝。

第2類（Aa③）：1個体（62）

最大径が胴部下半に位置するため、下膨れの形態をなす。内面に輪積み痕が認められる。薄手で調整は丁寧である。胎土に砂礫を多く含む。

第3類（①・②）：2点（60・61）

頸部から胴部の破片を一括した。60は1類と似た形態になる。

漏斗状土器（第3図56）：1個体（56）

管部から口縁部に向かって直線的に広がる形態から漏斗状土器とした。管部の一部を欠損する。胴部の縄文は単節LR。調整は粗雑で内面はケズリ痕が顕著。胎土に砂礫を多く含む。口径7.9㎝、器高7.4㎝、管の最下部径2.2㎝。

底部（第4図63～80）：18個体が確認された。63～79は深鉢とみられ平底や浅い上げ底をなす。接地部が外側に張り出す特徴が窺える。80は立ち上がりが緩慢で底面は平坦ではない可能性がある。

４．発掘資料との比較・検討（第5図）

興津遺跡では土器は、時期別にⅠ群からⅣ群に分類されている。そして、関本資料と関係するⅢ群の続縄文土器は、以下の1～７類に細別されている（澤編1979）。

1類：緑ヶ岡式に比定されるもの

2類：フシココタン下層式の仲間

3類：興津式として一括できる土器

4類：下田ノ沢Ⅰ式（大沼1972）の古いグループ
「澤編1978」でⅢ群2類としたもののうち突瘤文があるもの

5類：下田ノ沢Ⅰ式の新しいグループ
「澤編1978」でⅢ群3類：下田ノ沢Ⅰ式、三津浦（澤1976）Ⅱ群1類の新しいグループとしたものの大半

6類：下田ノ沢Ⅱ式の古いグループ
同型式は7号住居址及び覆土出土の土器の分析から古、新に分離した。

7類：下田ノ沢Ⅱ式の新しいグループ

関本資料のうち深鉢1、2類は、緑ヶ岡式土器の特徴とされる貝殻文や綾くり文をもつことから（河野1959）興津Ⅲ群1類に、深鉢5～7類は主に内面からの突瘤文をもつことから興津Ⅲ群4類にそれぞれ相当する。深鉢8、14類は突起上に幅広の貼り付けがあり細い隆線が斜め下方に配されるもので興津Ⅲ群5～7類のいずれかに含まれると考えられる。

次に、これ以外の深鉢3、4、9～13類、鉢、浅鉢、壺を興津Ⅲ群3類（興津式）との比較を行う。まず、興津式の内容を澤の記述に補足して整理しておこう。

【興津Ⅲ群3類】

器形：深鉢を主体に壺形（10-1・6）が加わる。
胴部上半で一度すぼまり、口縁が外傾または緩く外反するもの（48-4など）がある。

口縁：平坦なものと山形（23-4など）がある。
吊耳状の把手の付くもの（23-1・2、など）がある。

文様：口縁に縄線文（24-3など）、縄端刺突列（25-2など）、沈線文（50-21など）がある。
内面から刺突を加える突瘤文（10-3）は稀である。
胴部に施されるものは縄文で、器面に対して縦方向に回転するものが多い（7-1など）。
条が横走するものもある（10-5など）。

関本資料の深鉢3、4、9～13類、鉢、浅鉢、壺の特徴まとめると以下のようになる。

【関本資料】

器形：深鉢31個体：86％、鉢1個体：3％、浅鉢2個体：6％、壺2個体：6％である。
口縁部が外傾または緩く広がるもの（深鉢3・4・10～12、鉢、壺）がある。

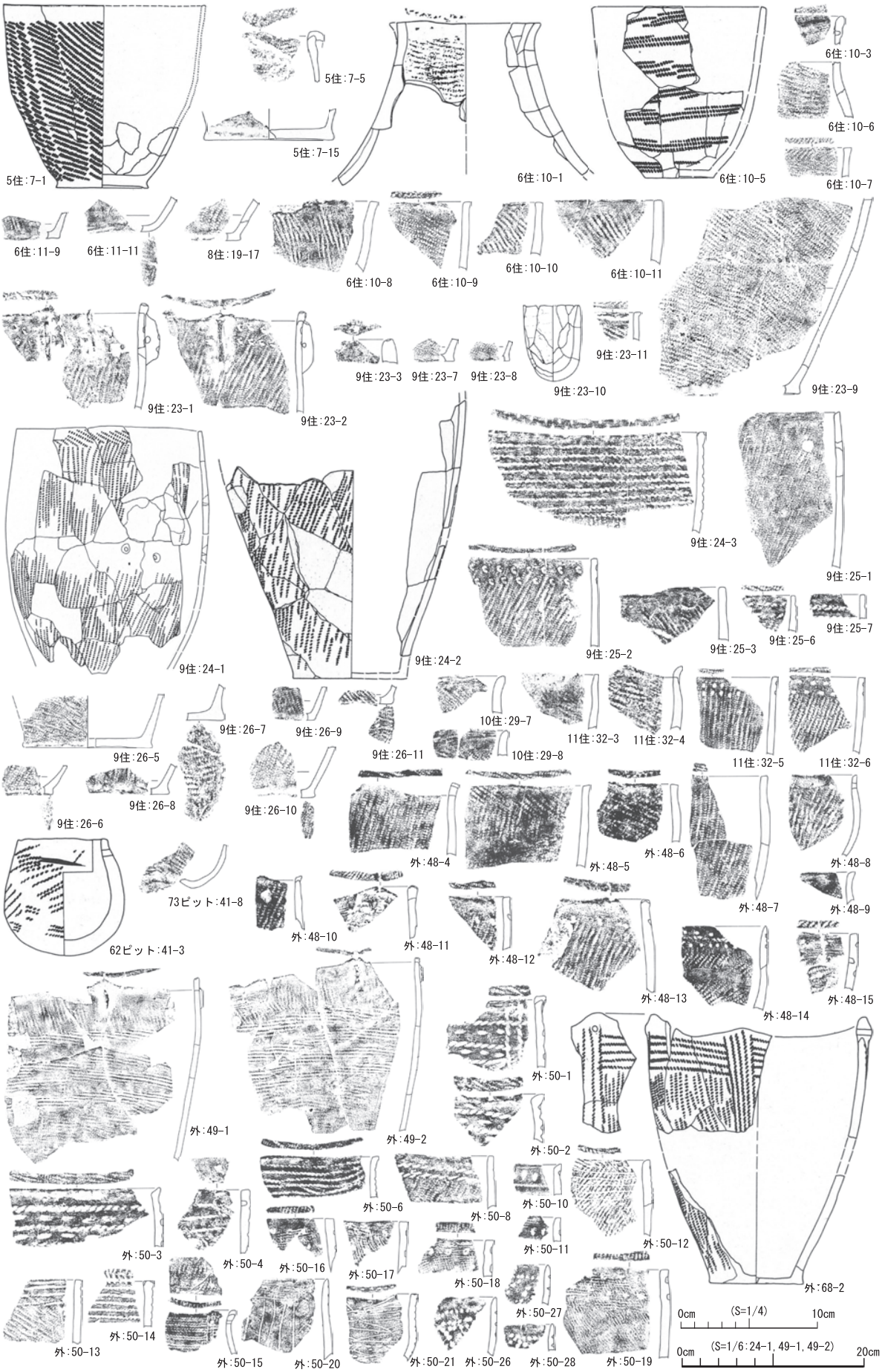
口縁：山形のものがある（深鉢3・10・11・鉢）。
吊耳状の把手の付くものはないがボタン状の貼り付けや隆線をもつものがある。

底部：浅い上げ底（深鉢、浅鉢）、丸底（鉢）がそれぞれある。このほかに底面が平坦ではないものがある（壺など）。

文様：口縁部の文様種類は同じである。突瘤文は含めていない。
胴部に施されるものには縄文、撚糸文がある。縄文は単節RLが18個体、単節LRが9個体ある。回転方向は大半が器面に対して縦であるが、条が横走するもの（3類）もある。

両者を比較すると、細部で異なっていることが判る。ただし、これが有意なものか、破片の総量や状態などに起因するかは判断できない。しかし、両者の違いは少なく、これらの関本資料は興津式土器に相当すると考えられる。

漏斗状土器は釧路管内では、釧路市緑ヶ岡1遺跡に「底部が窄まり漏斗状になる鉢」として報告したもの（高橋ほか2015）、幣舞遺跡には注口部と判断した



第5図　興津遺跡第Ⅲ群3類土器（澤ほか1979:註3）

管部の破片（註4）のほか、釧路町天寧1遺跡（鈴木編2011）での出土例がある。道内に視野を広げると、旭町1遺跡（矢吹ほか1983）で「土製品」が土坑から2点が重ねられた状態で発見されたほか、えりも町油駒遺跡で「土製品」が破片を含め63点出土している（赤石2000）。これらの時期は縄文晩期後半から続縄文前半であり、本例も同時に採集された土器の内容から、この時期とみてよいだろう。

5．まとめ

関本資料のうち土器は、完形土器を含む241点があった。深鉢、鉢、浅鉢、壺、漏斗状土器ごとに胴部から口縁部の形態、突起の有無など口縁部の詳細、文様の組み合わせで分類した結果、深鉢に14類、鉢に1類、浅鉢に2類、壺に3類、漏斗状土器に1類がそれぞれあることが判った。これらは、緑ヶ岡式、興津式、下田ノ沢Ⅰ式の古いグループ、下田ノ沢Ⅰから下田ノ沢Ⅱ式に相当するものである。

興津式としたグループは、興津第Ⅲ群3類（型式設定資料）と細部で異なる部分もあるが、基本的な内容は大きく異ならないものと考えられる。漏斗状土器の時期も興津式とみてよいであろう。

さて、興津式の型式設定に至るまでには、幣舞遺跡の瓢形土器（澤1959）、緑ヶ岡遺跡（澤1968註5）、下田ノ沢遺跡（大沼1972）、桂恋フシココタンチャシ（西1975）など縄文晩期後半から続縄文の遺跡・遺物の発見、調査が連続して行われた。また、近年では幣舞遺跡（石川1994）や天寧1遺跡（鈴木編2011）など膨大な資料が蓄積されている（石川1994）。その経過点である興津遺跡の発掘調査は、緑ヶ岡式や興津式の時期的な位置付けがまだ固まっていない段階とすることができる。澤は興津遺跡の発掘調査が終わった段階では「ためらい」を感じながらも緑ヶ岡式（Ⅲ群1類）以降を続縄文としている。

小稿では型式設定の契機になった関本資料を通して興津式土器を考察した。今後も資料公表を着実に進め、この地域における縄文晩期から続縄文の様相を明らかにしてまいりたい。

諸先輩、諸兄のご指導を請うものである（註6）。

【註】

1　遺物点数は調査後、再集計したものである。
2　整理箱はYシャツの包装箱で、内寸35×20×5㎝程度の法量である。
3　図中の表記は澤編1979掲載の、遺構種別：図番号ー遺物番号を示す。
4　澤田の実見による。
5　調査は1959、1961～1964年に行われた。
6　小稿は澤田が執筆し、石川朗（釧路市埋蔵文化財調査センター）が全体を調整した。

引用文献

赤石慎三．2000．Ⅵまとめ．油駒遺跡，p90-95．えりも町教育委員会，えりも．
石川朗．1994．釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅱ．釧路市埋蔵文化財調査センター，釧路．
牛沢百合子．1979．付2釧路市興津遺跡1977・1978年度調査時に出土した動物遺体の概要．釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ，p129-132．釧路市教育委員会，釧路．
宇田川洋．1977．8鉄器文化の発展．下田ノ沢式土器の成立．北海道の考古学2．p76-85，北海道出版企画センター，札幌．
大沼忠春．1972．Ⅳ貝塚の発掘．出土した遺物（土器）．北海道厚岸町下田ノ沢遺跡，p21-28．厚岸町教育委員会，厚岸．
河野広道．1959．北海道の土器．郷土の科学，23．北海道地学教育連絡会，札幌．
佐藤直太郎．1956．（44）釧路市内のアイヌ地名解6．郷土の足跡．（再録）釧路市立郷土博物館々報，193：15．
澤四郎．1959．第1回市内遺跡調査覚書－益浦，興津桂恋方面－．釧路博物館新聞，93：3．
澤四郎．1959．幣舞出土の土器（表紙説明）．釧路博物館新聞，94：1・7．
澤四郎．1968．北海道釧路市緑ヶ岡遺跡（第三次）．日本考古学年報，16：108．
澤四郎．1976．4出土した土器．釧路市三津浦遺跡発掘報告，p21-24．釧路市教育委員会，釧路．
澤四郎・西幸隆（編）．1977．釧路市興津遺跡発掘報告．釧路市教育委員会，釧路．
澤四郎（編）．1978．釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ．釧路市立郷土博物館，釧路．
澤四郎（編）．1979．釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ．釧路市立郷土博物館，釧路．
鈴木宏行（編）．2011．釧路町天寧1遺跡（2）㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第274集．財団法人北海道埋蔵文化財センター，江別．
高橋勇人・澤田恭平．2015．Ⅲまとめ．釧路市緑ヶ岡1遺跡・材木町3遺跡，p20-21．釧路市埋蔵文化財調査センター，釧路．
知里真志保．1956．3-13川に対する古いアイヌの考え方Ⅰ．アイヌ語入門，p40-42．北海道出版企画センター，札幌．（1985復刻）
藤沼邦彦・秋山真吾・赤坂朋美・宮本明日香編．2008．第5章第1節（2）無地という用語について．青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書，p12-13．弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター，弘前．
矢吹俊男・種市幸生・田口尚・立川トマス・小山田真弓．1983．旭町1遺跡．㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第10集．㈶北海道埋蔵文化財センター．札幌．